

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16759

研究課題名(和文)擬態語に由来する程度副詞&lt;ちょっと&gt;類の成立と展開

研究課題名(英文)A Historical study of "Chotto" type adverbs

研究代表者

深津 周太(Fukatsu, Shuta)

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：50633723

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文): 中・近世日本語を対象として、[擬態語+と]型の連用修飾表現に由来する<ちょっと類>程度副詞に関連する諸問題を考察した。本研究の核となったのは[擬態語+と]型が程度副詞化するメカニズムについてであり、さらにその線上で近世に「ちょっと」が感動詞化するプロセスを明らかにした。また、<ちょっと類>を構成要素とする「ちょっとした型」と「ちょっとの型」という二つの連体表現形式の歴史を解明した。

研究成果の概要(英文): The purpose of this study is to describe the history of "Chotto" type adverbs derived from the expression of "onomatopoeia + to" type. Particular emphasis is on the mechanism by which "Onomatopoeia + to" type expression changes to a degree adverb. It is also an achievement that clarified the process by which it changes to an interjection. In addition, this study revealed the history of "Chottoshita" type and "Chottono" type which are two expressions derived from "Chotto" type adverb.

研究分野：日本語学

キーワード：副詞 ちょっと 擬態語 感動詞 機能変化 連体詞 程度小

## 1. 研究開始当初の背景

「ちょっと」類程度副詞（以下、〈ちょっと類〉）は、[擬態語＋と]型連用表現が一語化したものである。さらにこれらは、呼びかけの感動詞へと転化していく。前者の程度副詞化は中世以降、後者の感動詞化は近世後期以降に生じる現象であり、〈ちょっと類〉は比較的短期間のうちに段階的な変化を経てきたと言える。このような動的展開を見せる〈ちょっと類〉は中近世日本語における機能変化のあり方を捉える上で恰好の素材となりうる。

程度副詞化・感動詞化については研究の蓄積が少ないが、これは現象としては近年文法史研究において取り上げられることの多い語彙化・文法化に通ずるものである。本研究は、従来文法史の対象とされてこなかった擬態語や感動詞をその枠内に位置付け直すことを目論むものである。

## 2. 研究の目的

〈ちょっと類〉の歴史的展開の分析を通じて、日本語における言語変化の実態に迫ることを目的とする。

(1) [擬態語＋と]型の構造をもつ連用修飾表現(チョットと、ソットと他)が程度副詞(ちょっと、そっと他)へと一語化するメカニズムを解明する。

(2) 〈ちょっと類〉が呼びかけ感動詞へと変化する現象を分析し、その要因と具体的な道筋を明らかにする。

(3) 〈ちょっと類〉から「ちょっとした」型連体表現が派生されるプロセスを描画し、さらにそれが、もう一つの連体表現の型と言える「ちょっとの」型といかに関わりながら展開してきたかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 帰納・実証を第一としつつ、これまでの研究成果を踏まえて仮説演繹的な方法を加えた。

(2) 文献資料から得られる用例だけを用いるため、用例数が多く得られないものに関しては、複数想定される道筋の中からもっとも蓋然的な解釈を施すことを目指した。

(3) 各課題の分析に際しては、可能な限り統語的・形態的特徴を重視し、その上で意味的特徴や運用方法といった点に着目した。

## 4. 研究成果

i) [擬態語＋と]型連用表現の程度副詞化  
中世から近世にかけて連続的に生じる[擬態

語＋と]型連用表現の程度副詞化について、具体的な変化の様相を論じた。

まずは研究全体に関わる問題として、何を以て当該形式が程度副詞化したとみなすかという基準の設定を行った。本研究で程度副詞の確例としたのは、形容詞修飾をするもの、「いま／ま／も／もう」などの程度副詞に下接するもの(いまちっと／まそっと／もうちよっと…)といった意味的に量程度を表すことが明らかなものに加え、格助詞・副助詞・コピュラを下接する名詞的用法(そっとの／ちっとばかり／ちよっとだ)である。これらの用法の出現時期から、各形式の程度副詞化がいつ生じたかを判断した。

特に本研究で扱ったのは「ちっと／そっと」の二形式である。「ちっと」は本来、【動作の軽度】を表す[擬態語＋と]型連用表現であり、それが動作の【程度】(が小さいこと)を表す段階を経て【量・存続量】へと意味的拡張を遂げる。一方、本来【動きの素早さ】を表す[擬態語＋と]型連用表現であった「そっと」は、動作時間の【存続量】(が小さいこと)を表す段階を経て【量・程度】へと拡張していく。一方で、統語的観点から‘名詞性獲得の順序’に目をむけると、「ちっと」が副詞的用法から名詞的用法を派生していくのに対し、「そっと」は名詞的用法を先に生み出している。これは、それぞれが程度副詞化の契機的用法とした【程度】と【存続量】が典型的に見せる統語的ふるまいが異なることに起因するものと考えられる。

「ちっと／そっと」は意味の抽象化を直接的な契機として程度副詞化する点と、程度副詞としての意味・統語的性質を段階的に獲得する点で共通しているが、その獲得順序には相違が見られることが明らかになった。

この成果については、[雑誌論文]①②の一部として組み込んだほか、それ自体を中核とした[学会発表]②として公開した。

## ii) 「ちょっと」の感動詞化

近世以降に程度副詞「ちょっと」が感動詞化する現象について、その具体的な変化プロセスを歴史語用論の観点を交えて説明した。

近世前期に行方指示文中に用いられ始める「ちょっと」は、クレル形を用いた「ちょっと来て下され」のような依頼文脈に出現しやすい。一方で類義形式である「ちっと」は「ちっと来い」のような命令形命令との共起が多いという特徴を持っており、「ちょっと」の方が相対的に配慮の度合いが高いことが窺われる。このうち「ちょっと」だけが「一せ一どの御ねがいちよつと／＼」のように行方指示部(～してください)を非表示とした配慮表現を生む。これは配慮表現として機能しうる「ちょっと」の領域において、より強い配慮を表す表現が求められた結果として解釈できる。この表現の中でも特に〈呼び出し〉に用いるタイプの[ちよつと＋φ]

は独立した一語文的な発話として現れることが多く、意味的にも統語的にも感動詞に近似するものであった。近世後期頃、この用法が「～さん、ちょっと」(来てください)のように呼称と共に起しながらひとまとまりの呼びかけ表現を構成することが多くなる。その段階を経て、近世後期以降に呼びかけ感動詞「ちょっと」が成立した。呼びかけ感動詞への変化は、それまで発話末に出現するという限定的な振る舞いを見せていた「ちょっと」が「一寸(ちよつと) 小金さん何だへ来たのかへ」のように発話頭に現れるようになったことから確認される。

この成果は、[学会発表] ③を経たうえで [雑誌論文] ③として公開した。

### iii) <ちょっと類>連体修飾表現の歴史

<ちょっと類>を素材とした<ちょっとした型>と<ちょっとの型>という二つの連体修飾表現の型について、<ちょっとした型>の成立および定着プロセスを明らかにしつつ、それぞれが歴史的にどのように関わりながら展開してきたかを叙述した。

#### (1) <ちょっとした型>の成立と定着

<ちょっとした型>は、対応する述定用法である述定用法「\*ちょっとする」を持たない点で形状動詞として特殊であるが、この点は、<ちょっとした型>が「ちょっと」類副詞の量程度用法に由来すると考えることで説明がつく。すなわち、量程度用法の「ちょっと」類は述語になる際に名詞述語文の形をとるため(「～はちよつとだ」)動詞述語形を必要としない。そのため、連体修飾表現だけが産出されたと考えられる。具体的には、中世後期に出現する「ちょっと」類副詞の一種「ちつと／そつと」に、時を同じくして生産性を持ち始めた副詞を連体表現化する[ト形副詞+シタ]という派生方式が適用された結果、「ちつとした／そつとした」という<ちょっとした型>の初出形式が生み出されるというプロセスが想定される。また、この<ちょっとした型>が近世期以降に高い生産性を獲得する要因を、従来同領域を担っていた<ちょっとの型>連体表現との対照を通じて明らかにした。<ちょっとの型>は、もともと<量の小ささ>(<程度の小ささ>)のいずれをも表すことができたが、近世以降、量用法へとその重心を移していく。これは、新たに生まれた<ちょっとした型>が程度専用形式であったためであり、結果として、それぞれの用法が二つの形式によって担い分けられることとなる。ここに起こったのは、<ちょっとの型>が量程度用法を未分化に担うという従来のシステムから「機能によって形式を使い分ける」というシステムへの転換であり、<ちょっとした型>が程度専用形式として採用されたことを意味する。

#### (2) 二つの型による機能分担の形成過程

まず中世における<ちょっとの型>に着目すると、「ちつとの／そつとの」は【程度】【量】を表す点で共通しつつ、「そつとの」には「そつとの間」のような時間の【存続量】が中心的な意味機能として備わっている。これは「そつと」の量程度用法が、元来それが様態副詞として有した【素早さ】という意味機能を出自とすることによる。一方、<ちょっとした型>は通史的に【程度】しか表さない。その結果、中世の「そつと」領域において「そつとの：そつとした」=【量・存続量：程度】という対応関係が芽生えた。この「そつとの：そつとした」という特定の形式による機能分担は、近世以降の「そつと」衰退に伴い「ちつと／ちよつと」に引き継がれ、<ちょっとの型：ちよつとした型>という‘型’間の対応関係へと敷衍された。

(1)の議論は[雑誌論文] ①として、(2)の議論は[雑誌論文] ②として公開した。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 深津周太、副詞「ちょっと」の感動詞化—行為指示文脈における用法を契機として—、高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房、pp.218-238、2018年
- ② 深津周太、「ちょっと」類連体表現の歴史—二つの型による機能分担の形成過程—、『日本語の研究』12-2、pp.18-34、2016年、査読有
- ③ 深津周太、<ちょっとした型>連体修飾表現の成立と定着、『国語と国文学』93-2、pp.48-62、2016年、査読有

[学会発表] (計 5 件)

- ① 深津周太「近世における副詞「なんと」の働きかけ用法について—感動詞化の観点から—」、第14回形式語研究会、2017年
- ② 深津周太、「大した／大して」の成立と展開、近代語学会、2016年
- ③ 深津周太、副詞「ちょっと」の感動詞化—行為指示文脈における用法を契機として—、日本語学会秋季大会ワークショップ、2016年
- ④ 深津周太、様態副詞の程度副詞化—名詞的用法の位置—、名古屋大学国語国文学会春季大会シンポジウム・副詞と名詞の交差—機能語の形成・派生と文法化—、2016年
- ⑤ 深津周太、「ちよつとした」型連体表現の歴史—‘案出’と‘採用’の経緯について—、名古屋言語研究会定例会、2015年

[図書] (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深津 周太 (FUKATSU, Shuta)

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：50633723